

北仏における不定代名詞 *on* についての言語地理学的分析

大河原香穂、伊藤玲子、清宮貴雅、関敦彦

0. はじめに

フランス語では不定の主語人称代名詞として *on* が使用される。これはラテン語で人間を表す名詞の単数主格形 HOMO を語源として成立したものであり、語源が示す通り、基本的に人間のみを指し示すことができる代名詞である。この代名詞は出現頻度が高く、これを扱う研究も多く見られるものの、言語地理学的観点からの分析はあまりなされていないように思える。本研究では、フランス語の方言地図である *Atlas Linguistique de la France* (以下 ALF とする) を用い、北フランス (以下北仏とする) におけるオイル語の不定代名詞 *on* に対応する形態の機能的差異および分布を分析する。

1. 先行研究

1.1. *on* に関する言語地理学的研究

本研究は不定代名詞 *on* を言語地理学的観点から分析する。この分野に関連する先行研究は我々が調査した限り 2 つ見られるが、いずれもオイル語圏外を扱ったものである。1 つ目は Schlaepfer (1933) である。この研究の主な目的はイタリア語における不定代名詞を言語地理学的に分析することであった。しかしながら、分析に際して、イタリア語圏に隣接するオック語圏およびフランコプロヴァンス語圏における不定代名詞も参考程度に扱っており、ALF を基にした分析を行っている。一方で、北仏についてはほとんど触れておらず、言語地図を用いた分析も行ってはいない。

2 つ目に挙げられる先行研究は Diémoz (2008) である。この研究の主目的はフランコプロヴァンス語圏における不定代名詞を言語地理学的に考察することであった。しかしながら分析に用いるデータとしては ALF ではなく *Atlas linguistique audiovisuel des dialectes francoprovençaux du Valais romand (ALAVAL)* と呼ばれる近年制作されたインターネット上で閲覧可能であり音声を開くことも可能な言語地図を使用している¹⁾。また、この研究はフランコプロヴァンス語圏以外にオイル語圏やオック語圏にも触れてはいるが、ロマンス語圏の不定代名詞の一部として導入部で概略的に扱うにとどまる。

1.2. *on* の用法に関する先行研究

代名詞 *on* は基本的に人間のみを指示対象とする代名詞であるが、その用法は多岐にわたっている。本研究では鈴木・中川・川口 (投稿中) によるフランス語の代名詞 *on* の用法の分類に依拠するが、ここで用いる分類は表 1 の通りである。先ず大きく分けて、代名詞 *on* は人称代名詞の代替として用いられるものと不定の対象を指示するものに分けることができる。人称代名詞の代替としての *on* は、特に話すことばにおいて、1 人称複数の主語を示す *nous* の同義語として多用されることがよく知られている。さらに不定の対象

を指示する *on* は「総称的」、「非総称的」、「除外的」、「非人称的」の4つに下位分類することが可能である。総称的な *on* は不定の対象を総称的に指示しており、「全員」を意味する代名詞 *tout le monde* などと同義であるとみなすことができる。非総称的な *on* は不定の対象を示しているものの全員を示すわけではなく、一部の少数の対象を指示しており、「誰か」を意味する代名詞 *quelqu'un* と同義であると考えられる。続いて除外的な *on* であるが、これは発話者でも対話者でもない者、つまり発話の場にいない不定の対象を示しているものである。フランス語においては、成句表現ではあるが、*on dit que* という連続が日本語の「らしい」に対応する伝聞の標識として機能しており、ここに現れる代名詞 *on* は除外的であると言える。最後に非人称的な *on* であるが、これはもはや指示対象は存在せず、主語代名詞の省略が許容されない標準フランス語において文法的支柱としてのみ機能する代名詞であると考えられる。そのことから非人称的な *on* は *ça* などの代名詞と置き換えても容認されうると考えられる。

表1 本研究で使用する *on* の分類

分類	用法	
人称代名詞の代替	<i>nous</i> など他の人称代名詞の同義語として機能	
不定の対象を指示	総称的	不定の対象を総称的に指示 (\doteq <i>tout le monde</i>)
	非総称的	不定の対象を示すが総称的ではない (\doteq <i>quelqu'un</i>)
	除外的	発話の場にいない不定の対象を指示
	非人称的	文法的支柱としてのみ機能 (\doteq <i>ça</i>)

2. ALFについて

本研究では北仏における *on* の使用を分析するにあたって *ALF* を使用するが、ここで *ALF* についての概説を設ける。*ALF* は 638 地点、様々な社会階級の約 700 人を対象としたフランス言語地図である。出版は 1902 年から 1910 年にされているが実地調査は 1897 年から 1901 年にかけて行われた。この地図の調査対象地域としては、フランス国内のみならず調査当時のガロ＝ロマン語圏であるベルギー、スイス、イタリアの一部やイギリス王室領であるチャンネル諸島も含んでいる一方、フランス国内ではあるがロマンス語圏ではないブルターニュ地方の一部は調査対象外となっている。またロマンス語圏外であり調査時点においてドイツ領であったアルザス＝ロレーヌ地方も一部を除き *ALF* の調査対象外である。調査対象語彙としては、*chat* (猫) や *où vas-tu* (どこに行くの) のような一般的な語彙や表現から *fléau* (穀竿) のような農耕にかかる語彙など幅広い対象を扱っている。地図の合計枚数は 1920 枚である。

3. リサーチクエスチョン

上では、北仏地域における代名詞 *on* に関しては *ALF* を基にした先行研究が見られないという点、および

この代名詞には複数の用法が見られるという点を確認した。またフランス語圏各地における語彙や表現の分布を調査した *ALF* に関する概説も行った。それらの事実を踏まえて、本研究で明らかにしてゆく点は以下の 2 点である。

- A. *ALF* の北仏の各調査地点では、用法の違いによって標準形の *on* に対応する形態に違いは見られるか
- B. 北仏において *on* に対応する形態にはどのようなものがあり、どこに分布するのか

1.1. で見たように、特に北仏地域に関しては、フランス語の不定代名詞について言語地理学的な観点から分析した先行研究は見当たらないと言える。ここに我々の研究の新規性があると考えられるだろう。

4. 調査対象と方法

4.1. 調査対象

本研究では、*ALF* 内で不定代名詞 *on* が使用されている言語地図 4 枚を分析の対象とした。地図の内容は以下のとおりである²⁾。

① 地図番号 90 : Quand on a (soif, on a le gosier sec.)

「のどが渴いているということは、のどがカラカラであるということである。」

② 地図番号 1083 : (Par ce temps,) on ne peut pas (dormir.)

「このような天候下では、眠ることができない。」

③ 地図番号 407 : On dit (que c'est bon de suer.)

「汗をかくことはいいことだそうだ。」

④ 地図番号 651 : On glisse (sur le sentier.)

「その小道では滑りやすい。」

表 1 から、4 地図における *on* は、①と②は人一般を示す総称的用法、③は *on* の指示対象に発話者が含まれない例外的用法、そして④は文法的支えとしてのみ機能を果たしている非人称的用法と分類することができる。

本研究では *ALF* で扱われている地点のうち、北仏のオイル語地域のみを分析の対象とする。南北の境界線には、Brun-Trigaud (1989:14) のオイル語-オック語境界と Tuaillet (1972:69) のオイル語-フランコプロヴァンス語境界を基にし、2 つの境界線以北をオイル語圏地域とした。境界線以北であっても、ゲルマン語圏である東部のアルザス地方 (地点 85 と 88)、またフランス国外であるベルギー (地点 176, 182~187, 189, 190~199, 290~294)、スイス (地点 64, 71~74)、並びにイギリス王室領であるチャンネル諸島 (地点 396

～399) を分析の対象から除いた(図1)³⁾。最終的な本研究の調査対象地点数は301地点である。

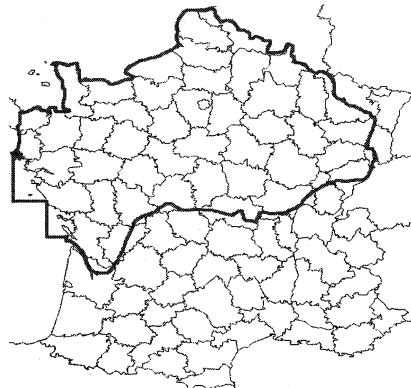


図1 本研究における調査対象地域

4.2. 調査方法

ALF の地図上の音声表記は IPA ではなく、Alphabet Rousselot-Gilliéron と呼ばれる音声記号で書かれて いる。*ALF* 上では、パリを含む広範囲において *on* は *ø* と表記されるが、IPA では [ɔ] と [ø] の中間の音で あり開口度の厳密な区別を示していない。*ø* 同様、*e* も [ɛ] と [e] の中間の音とされている。Le projet SYMILA による音声対応表を基に *ALF* 上の表記を IPA 表記に書きかえ、*ø* は一般的なフランス語辞書に載っている [ɔ] に、*e* は [ɛ] に書きかえた⁴⁾。形態の区別は、母音の口唇形状、舌の位置、開口度の3点で行い、鼻音 性や長短による区別は行っていない。そのため本研究では、[a] と [ɑ] のような先述した3点が一致して いる口腔母音と鼻母音を、1つの同じ形態として記号を付与した。また、*ALF* には半鼻音化を表す記号が存 在し、その記号を母音の上に付与すると、口腔母音と鼻母音の中間くらいの鼻音化された母音を表すこ ができる。しかし IPA では表記不可能なため、本論文内では母音の後ろに «∞» が置かれたものを半鼻母音 として表記する。以上の工程を踏まえたのち、形態ごとに記号を付け、Excel の散布図機能を用いて地図を作 製した。尚、同じ地点で複数の形態が見られる場合は、第1形のみを分析の対象としている。記号と形態の 対応はそれぞれ、○ : *on*([ɔ], [ɔz], [ɔ∞], [ø], [o], [oz]) 、■ : *an*([ã], [a∞], [ān], [a], [an], [nã]) 、◎ : *vn*([v̑], [v∞], [vn]) 、◇ : *en*([ɛ], [e∞], [e]) 、✖ : *no*, *nu*([no], [noz], [nu]) である⁵⁾。*on* に対応する 形態が4地図において一致していない地点は «・» で示すこととした。

5. 結果と分析

以下の図2は、4.2. 調査方法で説明した Excel の散布図機能を用いて、4地図全てで同じ形態を表した地 点には形態を表す記号を、4地図で形態が一致していなかった地点には «・» を表した地図である。

調査した301地点のうち、4地図全てで同じ形態だったのは269地点で、北仏全体の約89%を占めてい た。一方、4地図で形態が一致していなかったのは32地点(約11%)であった。

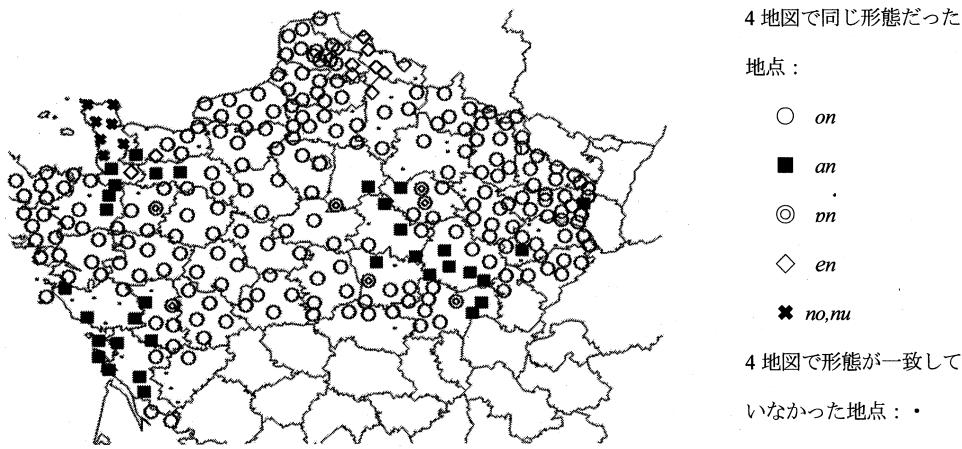


図2 ALF の北仏における on に対応する形態の分布

5.1. 用法との関連性

本研究の目的の1つは、北仏において on は用法によって対応する形態が異なるのかどうかを考察することである。ALF の4地図の on における用法は3つに分類出来ることから (cf. 4.1.)、on の用法によって形態が異なる可能性があると考えた。4地図で同じ形態だった 269 地点では、用法によって形態を使い分けていると考えられる。4地図で形態が一致していなかった 32 地点における用法と形態の関連性について、ここで詳しい分析を行う。32 地点が見られる地域を図2で確認すると、北仏の北部から東部にかけての一帯、北西部、西部であった。以下の図3は地図①～④において 32 地点で見られた形態を表している。

地点番号	①	②	③	④	地点番号	①	②	③	④	地点番号	①	②	③	④
12	on	on	an	vn	147	on	[u]	[v]	[u]	448	an	an	an	vn
25	vn	an	vn	vn	241	on	on	vn	on	459	vn	vn	vn	on
46	an	an	an	vn	253	[u:]	en	en	en	461	on	vn	on	vn
47	on	on	on	vn	261	[u∞]	[u∞]	[u∞]	[so]	478	on	on	on	an
55	vn	vn	vn	an	270	on	on	[ü]	[ü]	518	vn	vn	vn	an
105	vn	an	an	an	281	on	on	on	[ü]	525	an	vn	an	an
109	vn	an	an	an	343	vn	vn	vn	on	529	an	on	an	on
122	an	an	an	on	349	an	vn	vn	vn	531	an	on	an	an
128	on	on	vn	on	376	no, nu	on	on	no, nu	621	an	an	an	on
133	on	on	vn	vn	417	on	on	on	an	904	on	on	[ö]	on
146	on	on	vn	on	429	an	an	an	on					

図3 地図①～④の 32 地点で見られた形態

同じ用法である地図①と地図②の形態が一致するかについて注目して図3を観察する。地図①②、地図③、地図④がそれぞれ異なる形態を表したのは 32 地点中 1 地点のみであった (地点 12: ブルゴーニュ地方コート＝ドール県)。地図①②③が同じ形態で、④が異なる形態を示した 14 地点 (地点 46、47、55、122、261、281、343、417、429、448、459、478、518、621) は、図2で「・」が見られる地域全体に分布し、地理的に限定されていなかった。地図①②④が同じ形態で、③が異なる形態を示した 4 地点 (地点 128、146、241、904) と、地図①②と地図③④がそれぞれ同じ形態を示した 2 地点 (地点 133、270) は、北部と東部で見られた。地図③と④の用法と形態について、地図①と②が同じ形態を表す 21 地点では一貫性がない。

また、地図①と②が異なる形態を示した 11 地点（地点 25、105、109、147、253、349、376、461、525、529、531）も、地理的に限定されていなかった。11 地点には北部の 1 地点（地点 253）と東部の 4 地点（地点 25、105、109、147）も含まれることから、北部と東部では地図①と②が同じ形態を示しやすいとは言えない。以上の分析から、北仏全体として *on* の用法と形態に関連性があると言うことは出来ない。

5.2. *on* に対応する形態と分布

次に *on* に対応する形態と出現する地域を観察する。地域を特定して示すために、地域圏が比較的小さく区切られていた 2015 年まで使用されていた旧行政区画を使用した。この区分では、フランス本土と周辺諸島は 22 地域圏に分けられ、それぞれの地域圏はさらにいくつかの県（2～8 県）から成っていた⁶⁾。本研究では地域圏を地方と呼ぶこととする。*ALF* の調査は、各県内の 1～14 地点で行われている。

5.2.1. *on, an, un, en*

図 2 の○が表すのは、4 地図全てで *on* であった地点である。標準フランス語で *on* は[ɔ̃] と発音されることから、以降では *on* を標準形と呼ぶことにする。北仏の 301 地点のうち 4 地図とも標準形だったのは 211 地点（約 70%）で、北仏のほぼ全域に分布していた。特に北仏の中央部には標準形が見られる。

標準形の変異形と考えられる形態 *an* が見られた。記号■は 4 地図全てで *an* であった地点を表し、北仏において 33 地点（約 11%）が確認された。この形態は以下の 3 地域で見られる。

先ずポワトゥー＝シャラント地方とその周辺では、■は特に大西洋沿岸に分布している。ポワトゥー＝シャラント地方で調査した 24 地点のうち 8 地点で■が観察された。詳しく見ると、シャラント＝マリティーム県で 8 地点のうち 6 地点、ドゥー＝セーヴル県で 7 地点のうち 2 地点であった。一方でシャラント県、ヴィエンヌ県では見られなかった。またドゥー＝セーヴル県の西に隣接し大西洋に面したペイ・ドゥ・ラ・ロワール地方ヴァンデ県では 10 地点のうち 3 地点で■が見られた。

次にブルゴーニュ地方とその周辺地域では、■が北西から南東の方向に帯状に分布し、ブルゴーニュ地方から東方面にも 2 地点観察された。この形態は、ブルゴーニュ地方 30 地点のうち 11 地点で観察された。詳しく見ると、ヨンヌ県で 6 地点のうち 3 地点、コート＝ドール県で 9 地点のうち 5 地点、ソーヌ＝エ＝ロワール県で 8 地点のうち 2 地点、ニエーヴル県で 7 地点のうち 1 地点で見られた。ブルゴーニュ地方の北に隣接するシャンパーニュ＝アルデンヌ地方オーブ県と北西に隣接するイル＝ド＝フランス地方セーヌ＝エ＝マルヌ県、またブルゴーニュ地方の東に位置するランシュ＝コンテ地方オート＝ソーヌ県とロレーヌ地方ヴォージュ県でも各 1 地点観察された。

さらに、■はバス＝ノルマンディー地方南部とその周辺地域ではバス＝ノルマンディー地方オルヌ県で 4 地点のうち 2 地点、カルヴァドス県で 8 地点のうち 1 地点、マンシュ県で 9 地点のうち 1 地点、ブルタニュ地方東部イル＝エ＝ヴィレーヌ県で 9 地点のうち 3 地点で見られた。この地域の■はノルマンディー

地方コタンタン半島の付け根で❖と隣接しているが、2つの形態は混在していない。

◎で表される変異形 *vn* は北仏で 7 地点（約 2%）が観察された。それらは標準形○と変異形■が現れる地域、つまりブルゴーニュ地方とその北に隣接するオーブ県と北西に隣接するセーヌ＝エ＝マルヌ県、またポワトゥー＝シャラント地方東部、そしてバス＝ノルマンディー地方の南に隣接するペイ・ドゥ・ラ・ロワール地方マイエンヌ県で見られた。

記号◇は 4 地図全てで *en* が実現されていた地点を示し、北仏で 11 地点（約 4%）が観察された。これも標準形の変異形と思われる。◇は以下の 2 つの地域で見られる。先ずベルギーとの国境にあるノール＝パ・ド・カレー地方とその周辺では◇がまとまって観察された。ノール＝パ・ド・カレー地方に限ってみると 22 地点のうち 8 地点で見られた。この地域では◇と○以外の形態は見られない。次にバス＝ノルマンディー地方南部とその周辺では、◇はカルヴァドス県で 8 地点のうち 1 地点、マンシュ県で 9 地点のうち 1 地点で見られた。この付近では○、■、◇、◎、«・» が混在し、この地域の北には❖が分布している。

以上のように、本研究で言語地理学的な分析を行ったことにより、*on* に対応する形態として標準形と変異形が存在すること、そしてそれらが現れる地域を確認できた。北仏において標準形は全域に分布している。変異形は周辺部の特定の地域に分布する傾向があり、地域によって 1 つの変異形、あるいは複数の変異形が存在する。また変異形が観察される地域では «・» も見られる。このことは、変異形が分布する地域では形態が揺れやすい傾向にあるということを示唆している。

Französisches Etymologisches Wörterbuch (FEW), vol.4, *homo*, -ine, pp.453b-460b は、*an* と *en* は、ラテン語の HOMO から現在の *on* に至る音声変化の中で生まれた変異形であると述べている。北仏の東部と西部では標準形と共に変異形 *an* が見られる。*on* と *an* は開口度が比較的広めであることが共通点であり、口唇形状（円唇、非円唇）と舌の位置（後舌、前舌）を変化させることで音声変化が可能である。これらの地域では、*on>an* の変異が起きたと考えられる。本研究で、*an* と *vn* は同じ地域で現れやすいことが確認された。この 2 つの音声は非常に近い音価をもつ変種である。*an* と *vn* は広い開口度と口唇形状（非円唇）が共通点であり、舌の位置（前舌、後舌）を変えることで容易に音声変化が可能であることから、*vn* は、*on>an* からのさらなる変異と推測される。変異形 *en* は、北西部において *on*、*an*、*vn* と共に観察される。*en* と *an* は、口唇形状（非円唇）と舌の位置（前舌）が共通点である。*an* より *en* の方が開口度が若干狭いことから、開口度を少し変化させることで *an>en* の変異は容易であろう。また、北部においては *on* と *en* のみが観察されることから、*on>en* という音声変化が起きた可能性も考えられる。*on* と *en* の開口度はどちらも比較的広めであるが、口唇形状（円唇、非円唇）と舌の位置（後舌、前舌）が異なるため、*on>en* というように *on* から直接 *en* に音声変化する可能性は低いと思われる。以上の分析から、北仏ではおそらく *on>an>en* という変異が起きた、という仮説を立てることが可能である。この場合、言語年代層について述べることは困難である。

5.2.2. *no*, *nu*

英仏海峡に突き出るコタンタン半島（ノルマンディー地方）では、標準形やその変異形は存在せず、異なる形態が見られた。図2で✿の記号が表す7地点（北仏の約2%）では、4地図全てで *no* あるいは *nu* と発音されている。この形態は他の地域では見られない。

*ALF*が出版される約15年前の19世紀末に、Louis Havet、Jean Fleury、Charles Joretの3人が、コタンタン半島において *no* や *nu* と発音される語彙の語源について議論を行っていた。Havet (1878:109-110) は、*no* と *nu* はラテン語の代名詞 NOS を語源とする *nous* による *on* の置き換えであるという説を唱えた。しかし Fleury (1881:402-404, 1883:342-345) は、*no* と *nu* は動詞の3人称単数形としか共起しないことから、それらの語源は NOS であるとする Havet (1878) の考えに反論し、その上で、*no* と *nu* は *l'on* (定冠詞 *le* が不定代名詞 *on* の前に付加された形態) から音声変化したと主張した⁷⁾。しかし Joret (1883:588-591) は Fleury が主張した音声変化は十分に証明出来ないとしてこれを批判した。さらに Joret (1884:424-425) は、コタンタン半島では人称代名詞1人称単数形の *je* が1人称複数形 *nous* の役割を持つようになり、その結果 *nous* は人称代名詞としての機能を失い、その代り *nous* は不定代名詞となった可能性がある、と説明した。つまり彼は、*no* と *nu* はやはりラテン語の代名詞 NOS を語源とすると主張した。他の文献では、語源辞典の *FEW* が *no* や *nu* の語源は HOMO であるという立場をとっている。また、ジャージー島 (*ALF* 地点397) の話し言葉における鼻音化と非鼻音化について述べている Spence (2000: 570) は、ジャージー島とノルマンディー語で見られる不定代名詞 *on* を表す形態[nu]（母音の前では代名詞の1人称との混交により[nuz]と発音される）の語源は、ラテン語の代名詞 NOS ではなく、*on* と同様に HOMO である、と言及している。未だに語源についての決定的な論証はないが、事実として重要なのは、*no*、*nu* はこの地域にしか現れず、他の地域に見られる音声変化とは一線を画していることである。

6. 結論

以上の分析を踏まえリサーチクエスチョンへの答えを提示する。リサーチクエスチョンは A 「*ALF* の北仏の各調査地点では、用法の違いによって標準形の *on* に対応する形態に違いは見られるか」、B 「北仏において *on* に対応する形態にはどのようなものがあり、どこに分布するのか」である。先ずリサーチクエスチョン A について、北仏の各調査地点では *on* の用法と形態に関連はないということが言える。北仏全体の地点のうち約89%の地点において4地図で揃って同形態であり、4地図で形態が一致していない地点でも用法と形態に関連性は見られなかった。次にリサーチクエスチョン B について、北仏では標準形 *on* 以外に変異形と考えられる *an*、*vn*、*en* や、*no*、*nu* という形態が出現するということが言える。標準形 *on* が北仏全体のうち約70%で見られ、北仏のほぼ全域で見られたのに対し、*an* は特にポワトゥー＝シャラント地方とブルゴーニュ地方で、*en* は特にノール・パ＝ド＝カレー地方とバス＝ノルマンディー地方で見られ、*vn* は標準形 *on* と変異形 *an* が隣接して見られるポワトゥー＝シャラント地方、ブルゴーニュ地方とその周辺、

バス＝ノルマンディー地方南部に点在していた。これらの北仏の東部と西部で見られる *an*、北部と北西部で見られる *en* は *FEW* でも代表的な変異形として挙げられていたが *ALF* 上でも実際の使用地域と共にその存在が確認され、分析から *on>an>en* という音声変化が起きたと考えられる。*no*、*nu* はノルマンディー地方で見られるが語源が諸説ありながらも決定的な論証は見当たらない。このように北仏では不定代名詞 *on* の用法と形態に関連性は見られず、また形態については周辺部で変異形や *no*、*nu* という語源が不明である形態が見られ、大部分で標準形 *on* が見られた。今後の課題として *ALF* の各地点のインフォーマントの年齢や職業、出身地等の情報を用いた北仏での不定代名詞 *on* の社会言語学的分析や、オイル語圏外での不定代名詞 *on* の言語地理学的分析を検討している。

註

本稿は日本ロマンス語学会第 56 回大会（京都大学、2018 年 5 月 12 日）において口頭発表した原稿を基に、加筆・訂正を加えたものである。発表についてご質問やご意見をくださった先生方に感謝いたします。また、本論文を完成するにあたり、ご指導を賜り適切なるご助言をいただきました、東京外国語大学大学院総合国際学研究院 川口裕司教授に心から御礼申し上げます。

- 1) ヌーシャテル大学の *Centre de dialectologie et d'étude du français régional* によって 1994 年から 2001 年にかけて調査された音声データ付きの方言コーパスである。調査は 25 地点で行われているが、その多くがヴァレ州のフランスプロヴァンス語圏である。<http://alaval.unine.ch>
- 2) かつて内は別の地図として扱われている。また地図番号 90 に関しては、2 つ目の *on a le gosier sec* の *on* は扱わず、*quand on a* の *on* のみを扱う。和訳は筆者によるものであり、*on* に対応する部分に下線を引いた。
- 3) アルザス地方は 2015 年まで使われていた地域圏の名称。使用した行政区分については 5.2. を参照。
- 4) トゥールーズ大学の *Patrick Sauzet* によって考案された、*ALF* の音声表記と IPA 表記の対応が書かれている。http://symila.univ-tlse2.fr/alf/notation_phonetique
- 5) ⑤ : *pn* は日本ロマンス語学会第 56 回大会の口頭発表後改めてデータを分析し直した際に見られた形態である。論文執筆に際して、新たに分析対象として加えた。また、[ɛ] は本来であれば他の形態同様 *en* とするべきであるが、*FEW* の表記を考慮し *en* とした。
- 6) GOUVERNEMENT.fr. La réforme territoriale. フランス政府による行政区画改革についての紹介ページ。
<https://www.gouvernement.fr/action/la-reforme-territoriale>
- 7) Fleury (1881:402-404, 1883:342-345) は、*l'on* の語頭の « l » が語末の « n » に同化し、次に語末の鼻母音の脱落が起き、その結果 [no] と [nu] に音声変化したと主張した。

参考文献

BRUN-TRIGAUD, G. (1989). *Formation du concept Croissant : contribution à l'histoire de la dialectologie française au*

XIXe siècle, thèse de Paris XIII, Paris.

BRUN-TRIGAUD, G. et al. (2005). *Lectures de l'Atlas linguistique de la France de Gilliéron et Edmont : Du temps dans l'espace*, Paris : Comité des travaux historiques et scientifiques.

CATFORD, J. C. (2001), *A practical introduction to phonetics*. 2nd ed, Oxford ; Tokyo : Oxford University Press. (邦訳『実践音声学入門』 竹林滋、設楽優子、内田洋子訳 東京：大修館書店、2006年)

CHAURAND, J. (1972), *Introduction à la Dialectologie Française*. Paris:Bordas.

DAUZAT, A. (1944). *La géographie linguistique*, Paris : Flammarion.

FLEURY, J. (1881). V. No, noz en normand, *Romania, tome 10 n°39*, Paris : Société des amis de la Romania.

——— (1883). IV. No normand et on français, *Romania, tome 12 n°46-47*, Paris : Société des amis de la Romania.

GILLIERON, J. (1902). *Atlas linguistique de la France : Notice servant à l'intelligence des cartes*, Paris : Honoré Champion.

GILLIERON, J. et al. (1902-1910), *Atlas Linguistique de la France*, Paris : Edition du CNRS

HAVET, L. (1878). VIII. Nous et on, *Romania, tome 7 n°25*, Paris : Société des amis de la Romania.

JORET, C. (1879). IV. Non' et on, *Romania, tome 8 n°29*, Paris : Société des amis de la Romania.

——— (1883). III. No = on, *Romania, tome 12 n°48*, Paris : Société des amis de la Romania.

——— (1884). XII. Nous = on, *Romania, tome 13 n°50-51*, Paris : Société des amis de la Romania.

MEYER-LÜBKE, W. et al. (1861-1936). *Grammaire des langues romanes*, Paris : H. Welter.

SCHLAEPPER, R. (1933). *Die Ausdrucksformen für „man“ im Italienischen*, thèse de Berne, Zürich.

SPENCE, N. C. W. (2000). Nasalisation et dénasalisation dans les parlars jersiais. *Annales de Normandie*, 50^e année, n°4, 2000. pp. 569-574.

TUAILLON, G. (1983). *Le francoprovençal : progrès d'une définition*, Aoste : SAINT-NICOLAS.

鈴木・中川・川口. (投稿中) 「フランス語不定代名詞 on の諸用法と通時の考察」 『ロマンス語研究』 52::.

URL

DIEMOZ, F. (2005). *Le pronom personnel sujet de la 3e personne du singulier et le sujet neutre en francoprovençal valaisan : étude morphosyntaxique*, retrieved on 5 March 2018 from <http://www5.unine.ch/dialectologie/ALAVAL_Articles/Diemoz_2009.pdf>.

FEW = von Wartburg, W. (1922-2002). *Französisches Etymologisches Wörterbuch. Eine darstellung des galloromanischen sprachschatzes (Vols. 1-25)*. Bonn: Klopp; Leipzig: Teubner; Basel: Helbing und Lichtenhahn; Bonn/Basel: Zbinden. Retrieved on 5 March 2018 from <<https://apps.atilf.fr/lecteurFEW/>>.

Le projet SYMILA (2014). *Transposition de la notation de l'Atlas linguistique de la France (ALF) en Alphabet phonétique international (API)*, retrieved on 25 March 2018 from <http://symila.univ-tlse2.fr/alf/notatoin_phonetique>.